

## I. 問題提起

国策映画からゲリラ的撮影への変化はアラブ世界（アジア・アフリカ諸国、イスラーム世界）でどのように経験されたのか。先進国との共通性・普遍性を持ちながらも、どのような固有性を示すのか。シリアの場合はどうなのか？

## II. 国策映画からゲリラ的撮影の例（ex. ドイツ、日本）

●完全な国策プロパガンダ映画の例→レニ・リーフェンシュタール『意思の勝利』（1934年、第6回ナチス全国大会の記録）

●国策映画を利用した体制批判の例

亀井文夫『上海』（1938）、『戦う兵隊』（1939）、『小林一茶』（1940）

→支配層の思惑：「負けているところ、戦争の暗い面を書くな」、「敵をいやらしく描け」、「軍人の人間としての表現はするな」

cf) 亀井の意図：「前線で戦う日本軍下級兵士」、「悠久な中国の大自然」、「戦争の被害者としての中国人民衆」

→視点や筋立てを複数化することで、問題の全体構造が浮かび上がり、その結果として公式言説は自ら溶解。

「社会や国家が全体主義の強度を強めれば強めるほど、あえて火中の栗を拾う覚悟で体制内から体制を相対化し、全体の意思や価値体系を換骨奪胎しようとするドキュメンタリー作家が登場する。そして、時代閉塞の状況下においては、こうしたドキュメンタリー作家が、時代の真相を伝えてくれる唯一の回路となる」（佐藤真）

→技術的な問題（カメラは荷車で4人がかりで移動、映像と音声は別に収録）

●戦後日本におけるゲリラ的撮影の例

小川紳介『三里塚・辺田部落』（1973年）

→住みながら撮ることでみえてくる側面。闘いの局面から＜村の時間＞へ、＜百姓そのもの＞の姿へ。ゆったりとした村の時間の中に闘争が入ってくる。86歳のばあさんの話等々。

「何度となく、家宅搜索、逮捕の場面が出てくるが、村人は激情することなく、冷静に、ゆったりとその事実を受けとめている。ニュース映像や闘争報告の勇ましい逮捕場面のイメージを期待すると、あまりにのんびりとしていて拍子抜けするほどである。だが、これが『国家権力』による家宅搜索や逮捕のリアルな姿である」（佐藤真）。

→<報道の自由>を建前とした社会

→技術的課題：同時録音システムの自作

### III.現代シリアにおける国策映画内部の体制批判

#### ※オマル・アミララーイ監督『ユーフラテス・ダムを巡る試論』（1969年、シリア映画総局）

→牧畜の侵入を防ぐために一日中、粘土の土壁を素手で造り上げる上半身裸のみずぼらしい男性。砂漠の突風に晒される遊牧民の姿。ひび割れた大地と老人のひび割れた踵の2つの映像を重ね合わせ、農村の人々が干魃に喘いでいることが示される。政府が掲げる「進歩」から取り残された生活の姿。

→東洋専制主義論で言及される「水力国家」。溝や水路、ダムの建設、さらに飲料水の分配、灌漑農業といった水治には、大規模な労働力や大規模な管理体制、絶対的権力が不可欠。分業や集約とともに調整や規律、指導に支えられる「協業」のあり方は、部族や小さな共同体からやがて広域の地域社会、さらには国家へと制度的に組織化されていく中で、「専制的なパターン」が生じる（ウィットフォーゲル『東洋専制主義』）

#### ※アミララーイ監督『シリアのある村の日常』（1972、シリア映画総局）

→映像全体を通じて、『試論』でみられたような進歩主義史観は影を潜め、代わりに一種の不協和音、あるいは悪循環構造。視点や筋立てを複数化することで、問題の全体構造が浮かび上がり、その結果として公式言説は自ら溶解。

- ①バアス党の抽象的、お題目的スローガン、啓蒙主義的言説の欺瞞性
- ②衛生問題を巡る住民達の非合理的な態度
- ③部族の支配や農民の貧困に行き着く農地改革の矛盾

→1980年代から1990年代にかけてドキュメンタリーよりもフィクションへ。検閲の問題。

### IV.現代シリアにおけるゲリラ的撮影への推移

#### ●2000年代の市場開放の流れの中での記録映画

#### ※アミララーイ監督『バアスの国の洪水』（2003年、フランス ARTE）

→「言葉と映像の二重性」が全面に。

- ①部族長はインタビューに答える中で過去の武勇伝や大統領への讃辞をますます熱を帯びた様子で語り出す。しかし、不自然な間や演じた後の姿も捉える。
- ②部族長の甥に当たる小学校の教頭が新たらしく届きながらも未だにセットされていないパソコン一式を示しながら現大統領からの「贈り物」に多大な感謝を示す。

→巨大な「アサド湖」の建設は、その流れだけでなく、人々の意識をも変えてしまった。しかし、「2つのダムもひび割れ、即座に修復しない場合には国内の36のダムが決壊する可能性を警告する当局の報告も露わになった」（アミララーイ）。自壊する可能性がある湖＝体制

「全体主義と言われる体制には常に亀裂がある。それが抑圧的であったとしても、社会の表皮を破って入り込むことはできず、表面上に留まる。支配者もこのシステムは完全に機能していると信じていないし、自分の考えが皆を説得できるとも考えていない。彼らの行動原理は恐怖であって、信念ではない。我々映画人は、社会に全くインパクトを与えていないが、この服従や従属から自衛すべく、文化を実践している。『声を上げることは可能だ』と示すためにも、我々が唯一望んでいるのは、この文化的、芸術的な実践が他者に届くことであり、ささやかな抵抗のオールタナティブとして機能することだ」（アミララーイ）。

→その後 UNHCR、アルジャジーラ・ドキュメンタリー等、後援の多様化

#### ●2011年の民衆蜂起以後の記録映画

→技術面での変化：携帯カメラで弾圧の現場を収め、ネット上にアップし、流通し、衛星放送でも取り上げられる時代。1982年のハマの大弾圧（市民推定1万～4万人が死亡）ではあり得なかった状況。

※ウサマ・ムハンマド監督+ウィアーム・シマブ・ベデルカーン監督『シリア・モナムール』（2014年、フランス）

#### ※アルフォーズ・タンジュール監督『カーキ色の記憶』（2017年、カタール）

①抑圧体制の歴史性：沈黙されてきた80年代の記憶。戦争の匂いは前からしていた。

②芸術作品としての完成度：色彩の多様性（カーキ色、赤色、緑色、白色）、音楽の適正（爆撃音と疲れた表情の人々）、直接的な表現を避けることで情感を喚起

「映画の中で情感を生み出そうとするのであれば、情感に抵抗し、ぶしつけに、直接的に表現することを避けなければなりません・・・どのようにして言葉と映像を組み合わせるかという点でいつも苦労しています。いかにして言葉が映像を説明しないのか、逆に言葉と映像を一致させないかに苦労します。観る側に別の感覚や新しいアプローチを感じさせるためです」（タンジュール）

③難民経験の産物。記憶を分かち合う。政治的には困難であるにせよ、少なくとも文化的なレプリゼンテーションを果たそうという意図。

「映画の中では政治的なメッセージや声高な講義調の表現を避けるよう努力しました。単にシリア人が共に生きてきた、カーキ色の記憶を生み出してきた長い時代について、誰にでも分かる物語を語りたかったのです。半世紀にわたって鉄と火をもって支配してきた独裁政権下での恐怖と抑圧に関する我々の意識を形にしたかったのです。私は質問の答えや問題の解決策を示すために映画を作っているのでは決してありません。むしろ、問いを立てるために作っているのです。人生の中で応えることのできない全ての問いを、映画の中で他の人と共に探そうとしているのです」（タンジュール）

## V.結論

●国策映画時代：国家後援の枠内での体制批判。編集による不協和音の設定。体制のイデオロギー、それが求める「意味の筋立て」をまったく否定せずに、別の意味体系を創出可能。

●ゲリラ的撮影時代：時代と社会状況に応じた映像製作のあり方。

→シリアの場合、状況的に「暮らしながら撮る」ということは事実上不可能。『シリア・モナムール』のように断片化、崩壊する可能性も。しかし、『カーキ色の記憶』のように語りを再構成することで歴史性へのアプローチを可能にする。

●現実とイメージの再構成への寄与。「虚実の境目」に漂う不明晰な世界を、その多面体のままに描き出す。



(<http://whoskillingciviliansinsyria.org> より、抜粋。2017年11月11日アクセス)

#### <主な参考文献>

- ウィットフォーゲル、カール A. 『オリエンタル・デスポティズム—専制官僚国家の生成と崩壊』湯浅赳男訳、新評論、1995年
- 岡崎弘樹「アブドゥッラー・ナディームにおける「金持ちの専制」批判」『中東学会年報』Vol.32-1, pp.89-118. 2016年
- 亀井文夫『たたかう映画—ドキュメンタリストの昭和史』岩波文庫、1989年
- 佐藤真『ドキュメンタリー映画の地平—世界を批判的に受けとめるために〈上〉』凱風社、2001年
- バーナウ、エリック『ドキュメンタリー映画史』安原和見訳、筑摩書房、2015年
- Cécile, Boëx, “La vidéo comme outil de l’action collective et de la lutte armée”, dans *Pas de printemps pour la Syrie*, La Découverte, 2013.
- *Cinéma et politique en Syrie. Écritures cinématographiques de la contestation en régime autoritaire (1970-2010)*, L’Harmattan, 2014.
- Maṭar fu’ād ed., ‘Umar Amīralāī ‘āsha muḥibban wa raḥla maḥbūban, Al-dār al-‘arabīyya li-l-‘ulūm nāshirūn, 2011.
- Salti, Rasha ed., *Insights into Syrian Cinema: Essays and Conversations with Contemporary Filmmakers*, Rattapallax, 2006.
- Tanjour, Alfoz, interview, <https://aawsat.com/print/816411> (*Al-Sharq al-Awsat*, 28 december, 2016)